

---

# よって件の如しひ？

犬羊

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

よつて件の如しつ？

### 【NZコード】

N14010

### 【作者名】

犬羊

### 【あらすじ】

よつて件の如しつ！の番外編。

丑妹視点の本編からずれたギャグと登場人物の元になつた妖怪の話があります。

壱・子 鉄鼠

壱・子 鉄鼠

昔々、主上に忠実な僧侶がいた。

生真面目な僧侶だったその者は、傍目から常軌を逸脱している程に主上を敬い、尊んでいた。

その僧侶、主上の御願いのため祈祷にてその望みを叶えてみせた。主上は僧侶の口頭の行いと今回のこととを合わせ、褒美を与えることにした。

しかし、それはその僧侶の寺と対立している他所の寺の僧侶により叶うこととなかった。

僧侶は断食を行つた。

主上も含め人々はその断食、祈祷にて主上を魔道へ落すためではないかと噂し、主上のためその僧侶を殺しに行つた。

しかし、そこにいたのは牛ほどの体躯を持った鼠であった。

鉄色の刃が如き毛を逆立て、それは自分の願いが叶わなかつた故となつた対立していた寺に対し罵詈雑言を叫び、やがてふと我に返つたような表情を浮かべた。

理性の光を目に宿し、それは四肢を使い走り去つた。

それは突然として時に唸り声を時に鳴き声を上げ、闇夜を駆け抜け消えた。

その僧侶は対立したる寺の者を呪ひにしため、魔道に墜ち、妖となりて地を駆けありき。

石の体と鉄の牙、刃の毛を持つその巨大なる鼠を人は鉄鼠と呼ぶ。

弐・丑  
件

貳  
丑  
件

昔々、豪雪降る中、破れ社で一人の男が座していた。

否、それは男ではない。娘である人の面は生の体貌  
件という名前を有す、未来を予知する異形は足を折り曲げ、そこ  
に座して待つていた。

びゅう、と一陣の凍てついた風が穴の開いた障子からするり、と入り込む。瞬く間に風は雪を孕み、かたちどるは幼き女の姿。白よりも尚、白い……雪の如き髪を振り乱し、視線を交わすだけで凍りつきそうな冷たい双眸を件に向ける。

そう。件は雪女を待っていた。  
先に口を開いたのは、件だつた。

「…驚かせ。」

件は立ち上がると、素早くその身を人型のそれとした。

「よもや、これほど美しき女子わたしが男を攫ひていたとは。」

「子とは失礼な。妾を甘く見ていると、何処ぞの男と同じく氷柱として家具になるとと思へ。汝は妾を退治しに来けむ、覇氣のなき男。やりてみよ。」

成人よりもどちらかと言えば稚児に近い雪女は、口をほんの少し動

かさず、それを伝える。

しかし、件はそれを聞いても何をするわけでもない。

ただ草食む畜生の大人しき眼で静かに見返し、火鼠の齧歯を懐から取り出してみせた。

「私は予知を行う妖怪だ。これを使えばお前は灰すら残さず焼け尽きる。その様は既に視た。」

「ふふふ、あなや。」

驚いた様子など微塵も見せず、雪女は凍える息を吐く。件はしばらく物も言わず、よつやつと長い息を吐き出したかと思うと同時に言葉を紡ぐ。

「汝は今死にき。故に、今ここにあるは雪女にあらず。ただの雪童なり。」

「……？」

疑問符ばかりを浮かべる雪女に如何に説明しようか、唸り考え、件は率直に言うことにした。

「童は殺せぬ。」

「ならば、どうす？ 我の家具が増ゆるのみなりぞ。」

「易き事。ただの童ならば、家にぐして帰るのみ。」

「……？」

混乱している雪女を僕のように乱暴に掴みあげると、件はまた連れ去るように家路へと向かつた。

慌てて、雪女が言つ。

「“馬鹿”の字とは“馬”“鹿”なり。牛は入りたらず。説明せよ。」

「

件はこれまたたっぷり時間を空け、その間あまり多くはない脳を全て使い、不器用な答えを導いた。

「……惚れた腫れたで言葉が出ぬ」

これより以降、件は雪に関する力が無いにも拘らず代々子孫に“雪”の字を与えた。

人の面に、牛の体躯、口より溢れるは未だ来ざる未来。

それとは対照的な人間らしさは何処か憎めず、さる妖を人は件と呼ぶ。

また件が視し未来は必ず的中するより、仍つて件の如し、と言ふ。

## 天岩戸眩しき君田論む葬式・前

「ああ、もしかしてあなたが吹雪姫ですか。お早う御座います」

目覚めて朝餉を摂りに行こうとした道すがら、お隠れになつていた天照大神が天岩戸からよつやつと出てきたよつな眩しさを備えた笑顔を振りまかれた。

都に居るというのに何故か滅多に聞かない京訛りは新鮮だった。しかし文字通り眉目清秀なその男の、すっと通つた眉、立鳥帽子から覗くほつれた様子の全くない髪に強い違和感を覚えた。

一般的な黒である、薄く茶がかかつていてるわけでもない。

私と同じ黒だ、そこに違和感。

「しかしもつ……」

自分の世界に没頭している中、その言葉で覚醒した。  
狩衣の袖を引き、男が傾きかけた陽を指差す。

一つ一つの動作が優雅だ。

よく見れば一藍に牡丹立涌と高そうな狩衣に身を包んでいる。

「午後でしたね」

「あつああ、た…確かにそ、そうですね……」

皮肉であろう言葉もこんな眩しい笑顔で言われれば、何故か嫌な気がしないものだ。

ただただ赤面するばかりである。

それに加え、田舎育ちの私にとってただでさえ知らない人と会話するのが困難だというのに、明らかに公家系の人と起き掛けにあったのだ。

大慌てである。

「ふふ、お聞きした通り変わった方ですね…」

何だか既視感がある男だ。

大体こんなところで何をしているのだろうか。  
そしてどうして、私の眉上から生えた白角に何も言わないのだろう。  
好奇の目すらよこさない。

「あ、私はちょっと、これで…」

空氣に耐えられなくなつて場を去りつゝすると、男はやはり優雅に道を譲るようの一歩ずれた。

「お急ぎでしたか、申し訳ない。どうぞ」

男が涼やかな目で通るように促す。

「うではない、と何故か疑問符が浮かぶ。

「飯を食つのに大急ぎかよ、吹雪」

「じゃ、蛇殿様！ うわ、うわあーじゃあこの方、……！」

後ろを振り向けば、そこには「」の家主にして巳の妖怪、蛇殿様がいた。

笑みを浮かべているだらう。その口元はいつも通りに檜扇で……はないもので隠されていた。

あのいつもの、叩けば頭が割れそうな檜扇ではない。

骨に張られた紙に鮮やかな紫の花が描かれた……か、かわは、かわひ、かわほ、かわほなんぢやらだ、名前は忘れた。大体自分が持つていいないといふのにしつかり覚えていのほうが変だ、そうに決まっている。

白に竜胆唐草の文様が描かれた狩衣を着た蛇殿はちらり、と男に目を向け、興味がなかつたのかすぐに視線をずらした。

合点いった。

毛色と目だけだ、似てないのは。  
で、あるならば。

「「」兄弟ですか！？？」

「阿呆。私に兄も弟も姉も妹もおらん。碎せがれだ、碎。名前は出水イズミだ、すぐさま忘れろ」

「申し訳ない、あまり父上は私を好いていないので。それと私は出水ではなく、主水シヤンスです」

どこの女の間にできた子と間違えたのだろう。  
なんて失敬な。

「あ、えつあなたのお父上は女が好き過ぎるので男は嫌いすぎるのですよ！」

「何のためのその台詞だ。さあ、もう用は済んだであらう、早々に

「帰れ」

「しかし、父上。頼まれてくれるつもりなどないでしょう。吹雪姫からも言つて頂けませんか？」

「JR十島の駅「ひじり」でぐらんに聞きましょ、蛇殿様」

「面倒臭い、大体お前も偉くなつたものだなあ。私にそんな口を利くとは」

そんな風に言われば押し黙るしかあるまい。

高位を盾にされれば誰だって何にも言えなくなるじゃないか。

「兎に角、私は葬式にはいかん」

「は？… 葬式？」

葬式とはまた唐突である。

「やうです、私の母上がなくなつたため功安寺で葬式をするので父上に来て頂きたいのですが…」

「行くわけあるまい」

「…と、まあ、頑なに拒んでおられるのですよ」

なるほど、それはそうだ。

蛇殿様がただの善意で行動することは滅多にない、だから気持ちを汲み取つて葬儀に参加：などありえないのだ。

でも、今確かに主水様は仰つた。母上の、と。  
死んだとはいえ女だ。

「でも行くでしょ？だつてねえ……」

大事な大事な愛人さんじやあないか。

「行かぬ、と言つているだらう？」

老若美醜問わず女なら、来るもの拒まず……なのに?  
不思議なこともあるものだ。

眩し過ぎるので正直あまり目を向けたくなかつたが、主水様に“こ  
れは難しいですね”と言つ視線を投げる。

「そう、ずっとこの調子で。父上に来て頂かなれば母上も救われ  
ませぬし……。それにこの話を抜きにしても父上には来て頂かなければ  
ば」

「……それは……？」

何を言わんとしているのか分からなかつたので聞き返すと、代わり  
に蛇殿様が嫌そーに答えた。

「これは今の官位を持つのに相当無理をしてな……。あれが私を出汁だし  
に睨みを利かせていたから今まで大丈夫であつたが、後ろ盾がな  
くなつた今では、ふ……どんな目に遭うか。少々楽しみではあるな」

“あれ”とは主水様の母を指すのだろう。  
つまりこう言つことか。

母がいた頃は“この子は大白蛇の子”だと睨んでいてくれたから、

誰も何もできなかつた。

鳥帽子を取つてやることすらも、だ。

しかし、母が死んだ今となつては“主水は大白蛇の子”と言ひ事實は忘れたことにされるのだ。

事実は変わらないが、忘れた“ふり”をして高い官位を引っ張がす手筈なのだろう。

だから、父である蛇殿様に改めてその事実は明白であることを強調するために葬式に出て欲しいのだ。

「だつたら尚更言つてあげてくださいよ、蛇殿様！」

上の事情を加味したのも事実だが、葬式でも何でもいい、私が外に出たい。

だが、蛇殿様はやはり氣乗りしないのか顔を顰めるだけだ。

「何度も言わせるなよ、行かねつたら行かぬ

主水様はそんな蛇殿様に苦笑いを禁じ得ない。

しかし、それでもこう言つしかないのだ。

「そこを何とかしてお経の一つでも読んで欲しいのですが…」

「はん…ならば誄詞しおりつたを奏上してやるッ…」

「……」

ああ、行かないんだな本氣で。

その時はそう思つていた。

気が変わったのか、それとも父親らしくしてやろうと思つたのか…結果、蛇殿様は功安寺へ向かうのだ。

「殊勝なことだ。お前が愛人の葬式に行くなどとは…」

小男一步手前で童顔、そんな容姿を持ちながら不釣り合いな厳めしい表情をして呴いたのが御年42の鉄鼠映テツノウエイである。

刀身のような鈍いねずみ色の髪が適当に肩口のあたりで短く切られているのは、鉄鼠さんが地の果てのよつた所で最低限の生活をしているからだ。

僧服を纏っていることから分かるように鉄鼠さんはその地の果てのよつた場所で住職をやっている。

私に言わせれば仕切り屋の煩い奴である。

そんな鉄鼠さんが今いるのは高そうな牛車の中だ。

所有者は蛇殿様、同乗者は蛇殿様と私。

闇色の角は生えていないし男でもない。

最初、蛇殿様は兄上と一緒に来るよう言つたのだが、それを了承しなかつたのが兄上だ。

珍しくも抵抗し続け、土下座して“行きたくないです”を連発したのだ。

…戦慄した、なつさけねー姿に。

「へえー殊勝なことなんですか」

だから私が来たのだ。

どうやら聞いた話では小袖は下着のよつたものらしい、意味分かんない。

下着つてのはもつといひ……禪じゃないの?

何を言つても仕方がない。

そう言うわけで私は急遽、蛇殿様に用意してもらつた細長姿である。

話よりも興味があるのは外だ。

物見から覗けば、人通りの多い路を通つているのが分かる。

直垂ひたたれや小袖姿こそでで歩いている通行人を指差し、“じゃあの方たちは下着姿でうろついている変態なんですか”と誰と限らず口にするが返事はない。

しかし、私が普段着ている小袖と比べると安っぽいそれだ。

「主水があまりにも煩くてな。大体、あれが普段つねのよつた名乗つているか、お前知つているか」

「知るわけあるまい。京には近寄れない私だぞ」

「若蛇の君。そのまんまですね。あんな眩しい笑顔振りまいときながら結構強かです、あの人」

昨晩夢に見たときにそう呼ばれていた。

良かつたね、中々浸透しているようじやないか。

「はっ！“結構”とは…侮るなけれ。言つておくがな、私はそもそも

も主水を授かつた際も一回だけだ、一回しかしていないのだぞ。私の子とも限らんのにあのように言ひ回つてているのだ、結構どころではあるまい」

私の子とも限らんつて…流石にそれはない。

あれは確実、蛇殿様の子だ。

似ていたじやないか。

「不謹慎な話を大声でするなッ！もう着いたぞ！」

その大声の方が牛車の外に響いているのは明白だが、指摘したところでどうにもなるまい。

鉄鼠さんは乱暴に前簾を上げ、逸早く牛車から降りて行った。

蛇殿様の発言が余程許せなかつたのだろう。  
鉄鼠さんは妹いもであるお福さんはそりやもう相当愛しているのだ。  
お福さん以外、ほかの女は同じに見えるほどに。  
一種の病氣である。

「早く降りろ、愚図愚図するな！」

もうこつそびいの軍隊である。

このまま蝦夷えぞに行つて討伐するのか。

蛇殿様が降り立つと周囲がざわめき出した。

蛇殿様がよもや本当に来ると思つていなかつたのだろう。

且と言つ曰が全て蛇殿様に注がれた。

だがそのいくつもの瞳にある感情は……決して好意だけではないのだ。

がしかし、ちゃんといふのだと、黄色い叫びをあげ、ふら、と氣絶す

る女が。

それを見て、ちょっと得意気に笑んでしまったのを扇で隠す蛇殿様はまるであれだ、あれ。

「光る君…的な？」

「何を言つている吹雪。卑う降りろ。映なぞも行つてしまつたぞ」

どうやら蛇殿様が降りたのを確認して、鉄鼠さんはそそくさと功安寺内へと向かつたようだ。

慌てて後ろを着いて行くと、寺内では大体の儀式が終わつたのか棺の前には人影が疎らであった。

「ふむ。ちょうど良い刻に来たな」

「いいえ、ちょっと遅かつたですよ」

人口密度の低さに頷く蛇殿様の隣に急に現れた主水様・自称・若蛇の君は例の京詫りと例の笑みで実の父親に言つのだつた。

「……！」

流石に驚いたのか蛇殿様も声を一瞬失つた。  
しかし、強かな主水様は止まらない。

「これはこれは、吹雪姫も来て下さつたのですね。ここにちは  
「ええ、あーはい…ここにちは…」

すると主水様は私の細長姿を上から下まで眺め回し、天岩戸伝説の  
ような眩しい笑顔を向ける。

「今日は刺激の少ない姿でいざりますねえ」

立ち聞きしていた他の参列者が疑問符を浮かべているのが目に入つた。

止めて、恥をかかせないで。」

息が詰まるわ、顔が火炎放射しそうだわで大変だ。

「お弟子さんは」一緒にではないようで…。ん…？あなたはどちら様ですか」

当然の疑問だらう、主水様は鉄鼠さんに目を向けた。

「……しがない僧侶だ」

「ぶつきらぼうなこ」の一言には理由がある。

鉄鼠さんは京で指名手配中と言つても過言ではない身分だ。そもそも京に来るのも反対であつただろうが、十二支に準えられた妖怪の中でも身分が高い…もとい優等生な蛇殿様の頼みであつたため断れなかつたのだらう。

十一支に一番憑りつかれているのが、この鉄鼠映なのだ。

「そうですか、わざわざお坊さんまで連れて来られるとは…父上は本当に、母上のことを愛して下さつていたのですね」

ほろり、とでも効果音が付きそつた台詞である。

大凡、口論み通りだらう。

周りの者が聞き耳を立ててゐるのだ。  
こう見ると嫌な男である。

「ああ、愛していたのは事実だぞ、お前の母親を愛していたのはな  
あ」

まるでその子であるお前は別だ、と言わんばかりのことを口にしな  
がら蛇殿様は座した。

「映、弔いの経でも読んでやれ」

一言返事をすると、鉄鼠さんは早速、棺の前の円座に座り、儀礼を  
済ませ読経をし始めた。

取りあえず私も蛇殿様の隣に座つたが、果たして私がこの間、何を  
思つべきか。

非常に微妙な立場にいるこの“私”が、妾にしようかと蛇殿様に言  
われているこの“私”が、納得し難い最早情にほだされたと言つし  
かないような感情を蛇殿様に抱いているこの“私”が！

「……」

そういう思つてゐる間に鉄鼠さんの読経は終わつた。  
何やらよく見えないが、片付けてからこひらに来た。

「い」苦労であつたな、映

「ふん、僧侶として当然の務めだ。吹雪ッ！」

何の前触れもなく、鉄鼠さんはこひらに視線を投げた。  
足が痺れて立ち上がるのもやつとだと言つて、そんな田で見られ  
たから急いでそちらに行かなければならぬ。

「では、映殿、吹雪姫。これから母上を偲び、生前の頃の話を致しますので……正直、知りもしない人間の話を聞くのはつまらないでしょ？別室に案内しますのでどうぞお寛ぎ下さい」

寺をまるで自分の家のよう扱つとは中々、恐ろしい男である。

「では、やつこいじだ。仲良つしづめ」

## 天井戸、眩しき畠田論む葬式・後

薄い障子である。

陽の光がさらさら、と入ってくるのがよく見える。

視覚的には良いが、これでは小声であろうと聞こえてしまつ。

そんな部屋に案内された。

「女中をおこしてこませるの、何なりと仰つて下せ。」

「いや、結構だ。茶ぐらし吹雪にでも淹れられよう。下げてもいいで構わない」

主水様の善意を無に帰し、まず鉄蟲さんは私に茶を入れるよつて言つた。

女中ももうこなくなつてしまつた。

顔を引ひきつらせぬほかない。

「…淹れられませんよ」

「なに…？」

「お茶なんて淹れられませんよ…」

「…そうか、すまん。お福も淹れられるから、お前も…と思つてい  
たが、どうか…」

沈黙が場を制すが、そんな中に「じょ」「じょ」と話し声が聞こえる  
のだ。

聞き耳を立てなくても聞こえてしまつ。

見たか、あの額から生え出した角。まるつきり鬼ではないか。  
いいや、あの蛇が飼っているのは牛だ。まだ来ぬ先を見通す牛を飼  
つてゐるそうだ。そちらは雄牛だと聞いていたが……あれは……？  
はん！では、その雄牛の仔ではないか。  
はは……よもや……それほど簡単に世に増えてもらつては困る。  
くく……ならばあの色狂い蛇の妾か！

「……。」

あまりいい会話ではない。

なるほど、兄上も行きたがらないわけである。

もう少し押さえればいいのに、噂話に花を咲かせるそのビックリの公  
家は堪え切れぬと声を上げて笑い出した。

そう、結局こうなのだ。

私としては自分が妖であることも人であることも意識したことはな  
い。

ただ何も考えずに生きているだけだ。

その場の「冗談として件であることを強調したり、人であることを強  
調したりするが「冗談以上に意味はない。

だが、その感覚が相手にもあるわけではない。  
文章博士と言つ高い高位を持つてゐる蛇殿様でさえあるのよつて陰で  
は言われるのだ。

そこにあるのは善意でも好意でもない。

好奇心と恐怖だけだ。

いや、過言であった。

蛇殿様の愛人方は良い部分しか見えずに、好意しか抱いていない可能性がある。

徐に鉄鼠さんが立ち上がった。

廁だらうか、唐突な人だ……ん?

何を思ったかすばーん、と障子を開けたのだ。  
噂話が聞こえるほどに薄い障子の方を……。

「てつ……ー?」

鉄鼠さん、と叫びそうになつたが、それは拙い。  
指名手配中と同等の彼だ。

「件の件は……おるべー面と向かつて言つが良しッ……」

何その“件の件”つて、アホみたいだ。  
いや、それ以前に噂話をしていたお二方はわたわた、と一目散に逃げて行つた。

こっちの耳に入ると思えば、あの噂話はなかつただろう。

「ね……　ねずみさん」

普段、糞が付くほど規則だなんだと煩いが、ギャップのためか物凄く良い人に見えた。

こちらに背を向けている鉄鼠さんがばつ、と振り返る。

「な、なんだ……そのねずみさんって……ー?」

「色々なものを考慮して配慮した結果の呼称ですよ。でも…そこまでしなくても良いとは思いますが、ありがとうございます」

「当然だが、吹雪はお礼を当たり前に言えるいっ子である。  
くー」と一応頭も下げておいた。

「何故礼を言つ…？」

「や、今だつて…ねえ。私とかその他諸々のために…」

「何を！私はただお前がここにいるから聞きたいことがあるなら直接聞けば良いとだなあ…！」

ああ、ただの空氣を読めない人だつたか。  
そしてお馬鹿さんなんだなあ。

「その目を止めろ」

「じゃあその性格止めてくださいよ」

言つたところで勿論、無駄だ。

鉄鼠さんは特に気にした様子もなく、自らで茶を淹れ始めた。  
「丁寧に私の分まで淹れてくれたのだが……はつきり言つて茶  
は好きではない、白湯の方がまだマシである。  
そんな訳で目の前に置かれた茶に目だけ落とす。

「なんだ、飲まないか？」

「…喉、乾いていないので」

「やつであつても社交辞令で飲むべきだ」

「……」

茶を飲むと何だか寝付きが悪くなる気がするのだ。  
それに廁も近くなる気がする。

総合結果、害はあっても利はない。

「しかしまあ……」

話を誤魔化すようにそう始めてみた。

「蛇殿様は何あんなに葬式に来るのを嫌がつたのでしょ。葬式  
仏教だからですか？いや、まさかそんなつまらないこと言わないで  
しょ」  
「うが……」

「容易に知れたことだ」

「じゃあそれを私に容易に知らせてみては如何でしょうか」

誤魔化しから始めた割には話が良い方向に転んだよつと思つ。  
鉄鼠さんは間髪入れずにふん、と答えた。

「あれは己の最愛の女人の最期を看取ることも葬式に行くことも出  
来なかつたのだ。何故、それ以下の女人の葬式に出るのだ」

言つまでもなく、この“最愛の女人”とは紫寿さんのことである。鉄鼠さんが普通にこのことを知つてゐるのは、やはり何だかんだで蛇殿様と仲がよろしいからだろう。

だが、まあ……なんと言つか……。

「しかしあう遅いではないですか、死んだのですよ？それはもうい  
ない、つてことです。一体誰に操を立てているのですか」

「六道の何れかの道を歩んでいるその女人に立てているのだひづよ

ああ、やはりそうだ。

何故これほどまでに死者に寄り添うのだろうか。

アチスキタカヒコネノカニ  
阿遼志貴高日子根神だつて死人の義弟と間違われて怒つたじゃない

か。

「死を知った後、鳥辺野から掘り出させ、火葬し、骨を埋葬させた  
そうだ。そうそうできることはない」

紫寿さんは一般的に見たら、間違いなく庶民の分類であった。  
それは彼女の父親を見ればわかる話である。

庶民と言つのは葬式も挙げず、経も唱えず、誄詞じのびつたも詠まない、ただ  
ごみ捨て場に屍を放るだけなのだそうだ。

蛇殿様の元に居続けければそのようにはならなかつただらうが。  
でも、そんなことは関係ない。

死人だ、死んだのだ。

私の両親も、多くの下男下女も死んだが、何かしてやるうとは思わ  
ない。

死んだら終わりだ。

生きている側にできる」と言つたら覚えていてやることと血を絶  
やさないことだけだ。

それ以上は必要ないのこと。

「何時まで死者に足を取られるのでしょうか」

闇に身を浸した亡者が生者のその足に手をかけている。そのようにしか思えない。

だが、違つと鉄鼠さんは口を開いた。

「水希、いや蛇殿こそが……死者の裾に取りつき縋つてゐるのだ」

「……」

思いつく限り一番嫌な答えが聞こえてしまった。

もうこの話は終わりにしたかったので、自然消滅を狙つて無言を通すが、鉄鼠さんはやはり空気を読まないのだ。

ただただ己が正しいと思ったことを、それが独り善がりの正義と言われようと突き通すだけだった。

「午の家の風光<sup>カザミツ</sup>も死者に縋らねば生きて行けない男だつたな……」

「……そうですね」

流石にここに来て鉄鼠さんも雰囲気を理解したのだろう、この話はそれ以上続かなかつた。

その後の沈黙はどれほど続こうと耐えられるものだった。やがて一通り話し込んだのか、蛇殿様と主水様が迎えに来た。

眠そうに欠伸をして平然と言つ蛇殿様。

「日が暮れる前に帰つたほうが良からつ。蜥蜴丸には伝えておいたぞ

「こんだけ待たせたてそれって……え？あれ……もしかして蛇殿様は帰らないのですか？」

「ああ一人で帰れ。それに待たせて、とお前は言つが来たいと言つたのもお前であろう」

口では勝てそうにもない。

鉄鼠さんは何の不満もないのか、一度頷き、それをと部屋を出ようとする。

なんだ、なんなんだ……会話せずに一体何をどう納得して、何も言わずに出でいくんだ？

「吹雪姫、早う行かなればおいていかれますよ」

「はあっはい、そうですね！それでは……！」

どうもこの人に話しかけられると普通に返せない。

ともあれ、本当に置いてけぼりを食らつてしまつので鉄鼠さんの後を追つた。

何の気なしに振り返ると蛇殿様が片目だけで主水様を睨み、何か言つていた。

やはりあまり仲は良じへない様子。

「羅城門から出て行かれるのですか…あそこ、絶対何か住んでいますよ。危ないですって」

「……お前も物の怪の類であろうつ

牛車に揺られしばらくして、鉄鼠さんは羅城門から京を後にすることを教えてくれた。

あそこは死体が積み重なつており、汚らわしいし臭いし、異形の者どもが出ると専らの噂である、大変危険だ。

「じゃあ聞きますけど、自分が妖怪だと意識したこと、ありますか？」

「ではお前、己が人だと意識したことあるか？」

「ないですが」

「ああ、奇遇だな。私もない」

言葉遊びじゃないんだぞ。

黄昏時によつやく羅城門前に着いた。

牛車が「」と停まり、あの間延びした声が前簾向こうから聞こえるのだ。

「着きましたよ、羅城門です。お坊さん」

相手が自分の主人ではないからか、蜥蜴丸さんは自分で前簾を掲げた。

無礼なのか、親切なのか…。

「ああ、すまぬ。しかしお前… 一体どんな教育を受けているのだ？ 蛇殿め、あれは女にしか興味を待たぬからな…」

妻を帶びていふとはいえ、鉄鼠さんも一応僧侶と言つ奴だ。  
思ひどころがあるのだろう、不満そうな顔をしている。

「そつですね、あの人は本氣で息子にすら何の氣も使いませんからね。帰りの時も何か言つておりましたよ、あんなに良い人なのに…」

少々打算的なところもあるが、それでも美貌の持ち主であるし何だか紳士的で良い感じの人である。

眩しい笑顔で皮肉を言われれば、悪い気どころか、こう、何だか：  
息をするのも苦しくなるような、そんな感じだ。

「馬鹿者め」

牛車から降りる作業をしていた鉄鼠さんは不意に動きを止め、振り

返つてそう言つた。

ええ、私もそう思つ。

父親なんだから子供を可愛がればいいじゃないか、なんて微笑ましい！

「良い人とは…。主水はお前を田舎娘と馬鹿にしていたのだぞ」

「何を言つてゐるのだろうか、そんな風に言われた覚えはない。疑問を感じていると、それを察して鉄鼠さんはため息をつきながらも続きを話しだす。

「あれは無茶な出世の道を歩み、今や中納言だ。中納言だぞ、中納言。正四位上のあれが、蝦夷の田舎娘に対して何故“姫”を付ける。懇意にしてゐるわけでもない、ただの下女同然の小娘に」

「……」

「お前、もう少し悪意に敏感になつた方が良いぞ」

なんて後味の悪いことを言つていいくんだ。

黄昏に霞む鉄鼠さんの後姿に毒づくが、本人には何の書も「えられなかつた。

「んじゃあー、家に帰りましょーか、吹雪姫」

「つて、吹雪姫つて言つたじやん！今あなた、吹雪姫つて言いましてよね、ね！」

私も大分この牛飼い童に慣れたものだ。  
それも全て私の牛好きが成せる業と、兄上の式神の世話を所以だ。

今や立派な牛友垣である。

早口で捲し立てるが、返つてくるのは対照的にゆっくりな言葉だ。  
マイペースの鬼である。

「ええー？そりやあ…私の主人のお妾さんですから、ねえ？」

「うひ…め、妾なのですか、私…？」

ではやはり、主水様が馬鹿にしているのにも気づかず…私は…。  
うう、嫌な男だ…上げて落とされたのだ。

あれから数日が経つた。

主水様は葬式後、大白蛇邸に来なくなつた。

本当に後見だけのために自分の父親を葬式に呼んだようだ。これは親子と呼ばないのでないか、冷た過ぎる関係である。

ともあれ、平和が一番良い。

刺激が欲しいと言つてはいたが、しばらくじりじりして過ごすもの悪くない。

邸内にある桜はまだ咲き誇つている。

花見をするのも良いだろう。

勿論、それには邸の主人蛇殿様の許可が必要だ。

そういうことで蛇殿様の行方を追つてみた。

蜥蜴丸さんに聞いたところ、今日は兄上を懇意の仲と言ひ名の顎で使える者に預け、がつちり教育させてるそうな。

大丈夫なのだろうか、てかお前が陰陽道について教えてやれよ。

いや、それよりも何をしているのだ、あなたは。

と心中で思つていると更に蜥蜴丸さんは続ける。

蛇殿様は蛇殿様でそろそろ大学寮に顔を見せなければ拙い、と言つことでそちらに向かつたそうだ。

どうやらもう一人の文章博士に全て押し付けていたらしく、慢性的なさぼり癖である…。

「はあ、じゃああれですか。今は邸内に?」

「ええそうですよ。しかし今日は客人が来るそうで…」子息がいらっしゃると

喉から変な音がした。

主水様が来るのか、嫌だ、怖い、あの人。

部屋で大人しくしてこよつと思つた途端に蛇殿様と鉢合せた。

「おお、良いところにおつたな。吹雪、これから私の体が来るのだ」「いやいやーいいです、結構です。私忙しいんです、巻き込まないでくださいー」

「んん、何に忙しいのだ。年中暇人め」

引っ張られ、連れて来られたのが蛇殿様の自室であった。  
同時に私の寝室でもあり、合戦場でもある。

「何故私と主水様を会わせたがるのですか…嫌だつて言つてるのに」

「主水だと、まさか。私の後継者に、と考えているんだ。主水では…ふふ、ある訳あるまい、あのド肩」

意地悪そうに歪んだ顔を蛇殿様は扇で隠す。  
後継者とは、また…突飛な。

「急ですね。近い内に死ぬのですか?」

「冗談である。

「いや、誰かに見せてやりたくてな…それなりに大切にしてあるのだと」

意外である……まさか紫寿さんとの子だらうか。

と、予想はしたが年齢を聞くと五ヶ月と答えられた。

「は？」

疑問符を浮かべると同時に、障子の向こうからよく通る声がかかる。蛇殿様が返事をすると、すつと障子が開いた。

子供特有のみだけではない黒の大きな瞳、ふにふに突つきたくなるような桜色の頬……小狩衣姿の子供だった。心なしかちょっと冷めたような半眼とそのむつりした何か不満なのか、と思つてしまつよつた表情が逆に子供らしさを引き立てて可愛い。

上手く形容できないが、猫のよつた可愛さがあるので。追えば逃げ、放つておけば遠くからじっと見ているような猫……ぐりぐりと構つてやりたくなるよつた可愛さだ。そこまでは普通の子供だった。

ただその頭髪が普通ではなかつた。

蛇殿様の方へ目を向ける。  
でも、ちょっとだけ安心した。  
この人にも父性があるのだ。

「一発で認知したでしょ？」

「はっ、生まれる前から認知していたわ」

月光を受けたかのような金色の髪は紛れることなく、蛇殿様の血なのだろう。

よく知らないが、きっとこの子が一番蛇殿様に近いのだ。

だから後継者にじょつと思つたに違いない。

「や、<sup>ナガレ</sup>、流。名を名乗らぬか」

「大白蛇、流」

ぽつん、とやう一言、ほとんど口を動かさずに流様は言った。

……無愛想を超えてくる。

「……や、やう言えば五ヶ月と言いましたよね。むしろ五歳くらいで見えますよ。なんですか、その意味の分かんない嘘は」

「嘘などついておらぬ。」この母はお産で死んだのだが、過期産でな。一生出て来ぬのではないか、と思えるほどに腹の中にいたのだ。そのせいか、かよに成長が速いのだ。そして三ヶ月でその成長も止まった。

なんてことを呟つのだ、と肝を冷やした。

お前を産むために母は死んだのだ、と聞こえたらどうするつもりだ。恐る恐る流様を見るが、別段変わった様子はない。

やはりその冷めているように見える半眼で無感情に真っ直ぐこちらを見返しているだけだ。

……いや、見返しているのではなく、ぼおつとしているのか？

……大丈夫だろうか。

「元服後には名前の頭に“水”を付け、“水流”にじょつと思つていふのだが。どうだ、良かう？」

「は、はあ」

「それよつお前、流を見て如何に思つた

私に聞くのか、今しがた大丈夫だろうか、と内心眩いた私に。 ぼおつとしている所には触れず、他の所に触れよ。

「いや、本当に良い仕事してますね!」としか言ひようがないです。 私どちらかと言つて子供苦手なんですねけど、流様は本氣で可愛いと 思いますよ。蛇殿様、こんな可愛い子をお作りになられるなんて… 結構、この平安京に貢献していますね」

よし、突っ込みどころのない完璧な世辞だ。

私が話している間も流様は眉一つ動かさず、ただ無言で田を真つ 直ぐに見て聞いていた。

可愛いのは事実である、ただちょっと何だか…呆けている気がする のだ。

蛇殿様はそつが、そつが、と思いつつでもこつたよつな雰囲気を 出しながら頷いた。

「では吹雪、喜ぶと良い。お前もその可愛い子とやうりを授かる」と ができるのだからなあ…」

「……」

え、まさか全部そのための?

不信の目を持つて何か言つてやうつと口を開くが、片目で笑まれる と言葉を失つてしまつ。 腐つても貴公子である、へん。

「おー、女

一瞬、誰がそう言ったのか分からなかつた。

が、答えはすぐそこ、小狩衣を纏つた子である流様である。  
ぶつきらぼつたその物言いは、敵意でもあるのかと疑つてしまつほ  
どだ。

「何を言つたか、流。お前の女ではないぞ、私の女だ。これは吹雪だ、  
良いな」

「吹雪」

蛇殿様の言葉を受けて、流様は私を名前で呼んだ。

：何を言われるのか。

やはり流様は無表情で、むつつりと子供らしからぬ表情をして口を  
小さく開く。

「よくお前、父上と付き合つた。何故だ。こんな見境のない奴と。  
視界に入つただけで孕むぞ」

出てきたのも子供らしからぬ言葉であった。

同時に本当にちょっとだけ一理ある。

良い觀察眼だ。

「……」

相当嫌われているのだろうか、蛇殿様は。

一体どんな気分なんだろうか、お気に入りである後継者にそんな敵  
意を丸出しにされるのは。

盗み見ると、存外微笑んでいた。

そうだ、忘れていた。

彼は父親なのだ、この程度の反抗、笑つて許すに……

「流。仕置きが必要なようだな……子に対する罰は尻叩きが良いと聞く

決まつてない。

そう言うと徐に蛇殿様は立ち上がった。  
五ヵ月とはいえ、あれほど喋れるのだ、それに相応の理性も備わっている。

流様は肩を震わせた。

と、同時に私も私で苦い思い出を回想していた。

忘れるものか、久方ぶりの再開の折、蛇殿様は私を辱めたのだ。  
止める気はないが、恨みを込めて睨んでみた。

「何だ、吹雪。その挑発的な目は、なんだつたら、お前もここに並ぶかよ

「……い、いいえ！まさか！」

流様は尊い犠牲である。

犠牲は無駄にしてはならないので、速やかに退出した。

了

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1401o/>

---

よって件の如しつ？

2011年10月6日19時02分発行